

佐々木義登

衿さやか「泡のような きみはともだち」(「せる」Vol.121)は社会制度の中でもがく女性を描いた作品です。主人公芽衣子は中堅の商社に勤めるOLで、間山という彼氏がいます。そしてるりちゃんという自立心を持った同期社員にある種の憧憬を抱いています。芽衣子は社内でも期待される都合のいい女性の立場に甘んじ、周囲に付度して生きていました。しかし間山とは別れ、嫌悪しあっていたはずのるりちゃんと間山が結婚することになります。その後、尊敬していたるりちゃんの弱さを目の当たりにし、未来に行き詰まりを感じつつ小説は閉じられます。現代においてなお女性性が囲い込まれている見えない壁を、登場人物たちの外側から描くことで、社会が抱える閉塞感を浮き彫りにしました。制度に従属しても、抗つても、苦しまざるを得ない女性の心のありようが胸に迫る作品です。

渡谷邦「その週末」(「あるかいど」73号)は記憶をめぐる物語です。ある日、ミツコは喫茶店で何気なく開いた雑誌に現在芸術家となつてドイツに暮らす昔の友人、田村オリエのインタビュー記事を発見します。記事を読むうち、かつて夏のプールで、体につけた紐を引っ張られ沼田とい

う教師に必死に泳がされた体験を思い出します。ミツコは自宅で古いアルバムを探しだし、沼田の自宅を訪ねるのでした。年老いた彼は十姉妹を放し飼いにし一人古い家で暮らしていました。プールで受けた仕打ちを話し、復讐に来たのではないと告げます。喫茶店で偶然開いた雑誌を端緒に、古い記憶が紐解かれ、過去と現在が交錯しながら次々にコラーージュされてゆく様子は刺激的かつ独創的でした。

幸村篝「蛇とアサコと幽霊」(「八月の群れ」Vol.75)一緒に暮らしていた父が部屋に帰ってこなくなつて数日がたったある日、突然やってきた見知らぬおばさんに主人公は連れて行かれます。行き先は「寿海荘」というアパートで、父と見知らぬ子供たちがおり、おばさんは突然義母になりました。「寿海荘」には蛇女やその子供のアサコ、名前も知らないアサコの弟が住んでいます。たとえ急にいなくなつても気付かれないようなアサコの弟、給食の揚げパンを夢想してスキップする蛇のようなアサコの姿は読むものを不穏な気持ちにさせます。まるで日本のどこかの町に実際に存在しそうな「寿海荘」で暮らす闇を抱えた人々の営みがノンフィクションのように描かれる筆さばきに怖気たりました。

松尾晴「油を濾す」(「琳琅」第六号)はガンリンスタンで働く若い男性が主人公です。ある日、年配の男性、木戸さんが同僚となります。横柄な店長や、わがままな客たちとの応接を通して世間の理不尽さが浮かび上がつてきま

加藤有佳織

「ぶつん」と意識が途切れた」と始まる田中さるまる「前夜」(「ココドコ」③)は、語り手の「意識の完全な空白」を表現する作品で、先へ読ませる引力があります。空白のあとには同じ風景がくり返され、彼は少しずつ異なる選択をします。この反復をとおして読者は彼の状況と率直な心情を知ります。10年前に人間ドックで脳内動脈瘤を指摘されて以来、「焦燥感」とともに生きてきました。経営するジムは成長する一方、恋人の弥との時間は癒しでありつつ「余剰」と感じられ、まして彼女や子どもと過ごし得る未来は想像の埒外でした。そうして29歳になりましたが、定期検査で動脈瘤の肥大が認められて手術が決まり、その前夜に病室を抜け出し、意識を失ったのです。硬質な仕掛けの語りを生への希望が滲み出る様が魅力的でした。

衿さやか「泡のような きみはともだち」(「せる」Vol.121)では、医療機関を顧客とする「そこそこ」の商社会社に勤める丸山芽衣子が、同期の羽田るりと営業所同僚の間山について語ります。小規模の営業所で静かに働く語り手にとって、「わきまえない」で仕事に邁進するるりは異質で、羨望と好悪混じる存在でした。その彼女が、縁故入社

で調子だけよい営業の間山と結婚します。彼と語り手は過去に付き合っていました。関係を隠していたため、語り手の喪失は「わたしだけ」のものでした。けだるい盛夏の情景のなか語り手の心理を切り出していく言葉は鋭敏でうつくしく、読み応えのある佳品です。「かわりばんこのおあいこ」(「樹林」Vol.68)もまた冴えた筆致で人間関係のぬくもりと残酷さを描出していました。

久里しえ「長い写真」(「あるかいど」73号)の桂子は兵庫県南部地震で被災し、実家を整理中に30cm×20cmほどの写真を見つめます。祖父が勤務した師範付属学校の教職員と生徒500名以上が写るものです。この学校の後身は国立大学の付属小学校で、写真はその資料室へ寄付します。幼い頃は遠く見上げるだけだった写真を近くから眺めると、そこには「誰一人として同じ子どもはいない」ことに気がつき、戦時に国民教育に携わり、家族には厳格すぎた祖父についてあらたな思いが浮かびます。過去を現在から未来へつなごうとする意志を穏やかに伝える作品でした。

中川一之「生き残った者に祈りを捧げよ」(「たまゆら」No.124)では、難民救援団体のカンボジア駐在員が貯水池補修工事現場を訪れ、工事の遅延を知り困惑します。強制収容所の跡地ゆえ「白骨死体の山」が発見されたのです。「手に触れられる形あるもの」としてポル・ポト政権の虐殺を目にし、語り手はつよく憤ります。そして、現場でシベルカーを不器用に操作する男が虐殺の生存者である

す。一方で一度火がつくと怒りをコントロール出来ず、自身を傷つけてしまう木戸さんの素性が次第に明らかになります。また主人公もサラリーマン時代に上司の暴言により自ら命を絶とうとした過去を抱えていたことが明かされます。結局木戸さんはふとした拍子に主人公の人格を傷つける発言をした店長に暴力を振るってしまいます。主人公はいたたまれない思いで木戸さんに寄り添うのでした。穏やかに暮らしたいという願いに反して、否応なく不幸に巻き込まれてしまう人々が丁寧に描かれています。様々な年齢や立場の登場人物をリアルに立ち上がらせた作者の力量に感服しました。

祖父江次郎「枯野」(季刊作家「第100号」)妻に先立たれた古い自宅で孤独に暮らす武雄は、迷い込んできた猫をジュンと名付け共に生活しています。毎日のように近くのスーパーマーケットで暇な時間を過ごしていましたが、旧友の小堺と出合い交友関係が再開します。二人は競輪に行ったり、居酒屋で酒を飲んだりして共に時間を過ごします。ある日、猫のジュンがアライグマに襲われて死に、小堺が自殺したという知らせを受け、作品は閉じられます。貯蓄があるわけでもなく、子供が見守ってくれるわけでもない、孤独な老いの営みを、淡々と冷たい視線で描けていた点を評価しました。

海辺こゆび「えんじゅの庭」(「樹林」Vol.687)は祖母の家

を母と訪れた十一歳のえんじゅに焦点を当てた物語です。古い家屋には祖母の叔母で目の不自由なちいばあちゃんも暮らしています。祖母と母、ちいばあちゃんとえんじゅの關係が対になって描かれます。深夜古い電話が鳴り、えんじゅがですが無言のままです。ちいばあちゃんはその電話が亡くなった賢一兄ちゃんからだと告げます。多様な世代の四人の女性が醸し出す、ダークファンタジーじみた世界観が読むものを魅了します。えんじゅの言語感覚の外側から、えんじゅの内面を明晰に語る、企みに満ちた語り手の存在も本作の特徴といえるでしょう。

磯村袖依「星空とタニ」(とある百万円にまつわる小説集)の主人公わたしは大学生、映画サークルで知り合った壮ちゃんと付き合っています。壮ちゃんの夢は映画監督で、わたしは夢を持つ彼に憧れに似たものを感じています。新婚旅行を映画にするため、二人は五〇〇円玉貯金を始めます。しかし平凡な人生を予感しているわたしと、夢を追い続ける壮ちゃんとの心の距離は次第に開き、わたしの就職をきっかけに別れてしまいます。時が流れ、結婚し三十五歳になったわたしがかつての貯金箱を開けると、出てきたのは大量のゲームセンターのメダルでした。誰もが経験する青春の青臭さと瑞々しさ、それに対する郷愁が描かれます。現実には搦め捕られてゆく主人公と、夢に固執しモラトリアムを続けようとする壮ちゃんとの対比と軋轢が見事に描かれていました。

ことも聞くと「発する言葉」を失くし、工事報告書には「最低限の事実」を記すのです。「言葉」の不足を背負いながらも綴られる言葉は、読後もずっしりと胸に残ります。

土合充夫「泥の顔」(「麦笛」第二〇号)では、7年間の会社勤務を経て短期の仕事で暮らす41歳の鳴海涼太が、地震に襲われた熊本でボランティア活動に参加します。秋田や仙台で大地震を経験していますが、被災地で作業する彼のなかには「高揚する誇らしさに似たもの」と「背中の皮膚が浮きたち、それから叩きつけられ沈み込んでいって波立つような感覚」が生じます。「誇らしさ」を抱く自身への違和と向き合う姿を冷静に描く、余韻ある作品です。

浅田厚美「かさぶたを剥がすように」(「別冊關學文藝」第六十五号)の語り手は、11年間の単身赴任から戻る夫のために自宅を片付けるマリです。学童保育所で経費がわずかに合わない、伝言メモが隠された革コートがリサイクルショップに持ち込まれる、といった職場での出来事と自宅の片付けを点々と描写しながら「何かがちよっとズレて、でもそのまま呑み込んで世の中が動いている」ことを力みなく受け止める語り口が印象的でした。

ふなはしちく「ライオンの扉」(「関西魂 ハードボイルド」)の美由紀は父を亡くします。父による虐待を疑っていた近所の人々は彼女を気づかいますが、父への警戒心と美由紀が殺したのかという疑念を抱いているようです。彼

女を虐待していたのは実は母や同級生で、父は黙々と手段を選ばず美由紀を守っていました。その裏腹が興味深く、また心配するよう詮索する近所の千賀江の造型が巧みでした。

「とある百万円にまつわる小説集」は彩りゆたかな作品集で、語り手の若い恋を描く磯村袖依「星空とタニ」や、やさしげな恋人のために退職を選んでも柏木あさ子をかく佐伯一果「ここを離れても」に鋭さがありました。

題材や文章が魅力的な作品に、看護師の視点から終末期の在宅医療を見つめる中村均「最期の願い」(「北の文学」第85号)、温泉町で図書室を営むスイス出身の女性がコロナ禍で経験する孤独を描く葉月乃馨果「レギーナさんの仄暗い図書室」(「樹林」Vol.688)、横断歩道をめぐる小学生と中年男性の駆け引きを観察する武村賢親「企鵝の歩み」(「琳琅」第六号)、生き別れた妻子を思いながら縁あって幼子を世話する弥平を主人公とするシクラ奈津の時代小説「弓弦をやしなう」(「樹林」Vol.687)がありました。「重力税」が導入された世界を仮想する湯船直美「ウエとシタ」(「樹林」Vol.689)も軽妙な作品で、続きがたいへん気になります。

「文学界」への推薦作●お二人の討議の結果、推薦作は、中島隆「いつか飛ぶだろう」(「雑記驛子」第27号)、杵さやか「泡のようなきみはともだち」(「せる」Vol.12)、立石富士「それだけの生」(「火山地帯」第206号)の三作になりました。